

令和6年度 播磨町郷土資料館 特別展

復元イラストから読み解く

# 大中遺跡と 明石海峡・播磨灘 を望む遺跡

—弥生時代後期集落の眺望分析—

令和6(2024)年 播磨町郷土資料館

# ごあいさつ

昭和37(1962)年に大中遺跡が発見されて以来24次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代の遺構や遺物が多数発見されました。これらの成果から、昭和42(1967)年には国指定史跡に指定されました。その後、遺跡公園として整備が進められ、現在では多くの方々に親しまれています。

今回は大中遺跡(播磨町)、東野町遺跡(明石市)、塩壺西・塩壺遺跡(淡路市)、五斗長垣内遺跡(淡路市)といった同時期に営まれた明石海峡や播磨灘を望む4遺跡について紹介します。当時の暮らし、景観や地形のイメージが伝わりやすい「復元イラスト」に着目し、そこから読み解ける当時の環境や地形を考察しました。更に考古地理学の分野から「眺望分析」を行い、これら4遺跡の立地が示す意味に迫りました。またこれら様々な環境に影響を受けながら生産された「らしさ」のある出土品を展示するなど、これまでにない新たな視点・切り口から大中遺跡を紹介します。

また、今回は新たに寄贈された文化財(大中・山之上遺跡採集石器)を展示し、ご来館の皆様にご覧いただけます。復元イラストで当時の様子を想像しながら大中遺跡のすばらしさを実感していただければ幸いです。

最後になりましたが、本展にご協力賜りました関係機関と各位にお礼申し上げます。

令和6(2024)年10月

播磨町郷土資料館 館長 水野 洋子

## 例言・凡例

- この冊子は、令和6(2024)年10月5日(土)～令和6(2024)年12月1日(日)に開催する特別展「復元イラストから読み解く、大中遺跡と明石海峡・播磨灘を望む遺跡―弥生時代後期集落の眺望分析―」の展示図録である。
- 展示品については、別紙目録に所蔵先・点数等を記載した。
- 本展は大川康裕(当館学芸員)が主担当し、山口格(当館学芸員)、福富優希(当館学芸員)河合たみ(当館整理員)が補佐した。
- 本文は以下の通りである。
  - ・復元イラストについて、各遺跡について  
漁具について、播磨町の新たな文化財、まとめ 大川康裕
  - ・眺望分析とは、各遺跡の眺望分析 宇佐美智之
  - ・眺望分析まとめ 森岡秀人
- 復元イラストはアプライドアート工房 小東憲朗が、図録土器イラストは藤川千尋が作成した。
- 展覧会の開催にあたっては、後述の機関並びに個人の方々にご協力・ご援助を賜りました。記して感謝の意を表します。(50音順、敬称略)
- 協力機関  
明石市、アプライドアート工房、淡路市教育委員会、京都芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター、兵庫県立考古博物館
- 協力者  
浅原重利、稲原昭嘉、宇佐美智之、工藤祥子、小谷義男、小東憲朗、篠宮正、永恵裕和、深井明比古、藤原清尚、森岡秀人



## 復元イラストとは

遺跡が発見されたとき、当時の暮らしや景観、地形のイメージを伝わりやすく紹介するために、「復元イラスト」が作成されます。

復元イラストは、発掘調査などで実際に遺跡から発見された建物跡などの遺構や土器、石器などの遺物、種子などの植物遺体、食用として解体された猪の骨などの動物遺体、河川跡など旧地形の痕跡など、入手できたあらゆる情報と、その他の文献などの資料を手掛かりに、当時に建てられていた建物や生業、植生環境、着ていた物、食べられていた物まで、当時の人々が生きた環境を詳細に復元し描きます。復元イラストとは、遺跡に関わった先人たちの研究の賜物と言えるでしょう。

## 復元イラスト画家とは

研究者が得た成果を元に、イラストによって当時の景観を復元する人、それが「復元イラスト画家」です。

復元イラスト画家は、絵が上手なのはもちろんのこと、対象地域の歴史や、遺跡の地形や特徴、当時の建物の構造、土器の形態などにも詳しくなければなりません。

復元イラストは研究者や先人の努力によって得た成果と、復元イラスト画家が培ってきた知見と画力が融合して形成されています。

### 復元イラストの作り方



1-1 研究者との打合せで情報収集し、要望を整理し、双方のイメージを共有します。



1-2 文献を調べ、遺跡を巡り復元イメージを膨らませていきます。



1-3 これまでに得た情報を元にラフ画を作成します。更に研究者と細部の調整を行います。



1-4 細部調整ののち、色付け・仕上げを行えば完成！  
イラスト「大中遺跡の土器群」：小東憲朗

## 復元イラストから 弥生時代後期の集落遺跡の 地形や景観を読み解く

これまで兵庫県内において、多くの遺跡で復元イラストが作成されてきました。大中遺跡においても復元イラストは描かれており、それらは常設展示され当館を訪れる人々が展示品を眺めながら当時の景観をイメージするのに役立っています。

各遺跡のイラストを眺めると、各々に「違い」があることに気づかされます。それは時代や遺跡の種類の違いなど様々ありますが、特に遺跡の立地に強く影響を受けていることがわかります。立地が違うことで見える景色が異なり、土地の利用方法も変化します。

本展では、復元イラストを足掛かりとし、大中遺跡と、同時期に営まれた明石海峡・播磨灘を望む4遺跡を取り上げ、眺望分析を用いて立地形から読み取れる目的や特徴について検討を踏まえながら紹介します。



2 遺跡位置図（国土地理院 地理院地図 GSI Maps をもとに作成）

発見から62年、見直し作業で新発見続々！

# 大中遺跡(国指定史跡 加古郡播磨町)

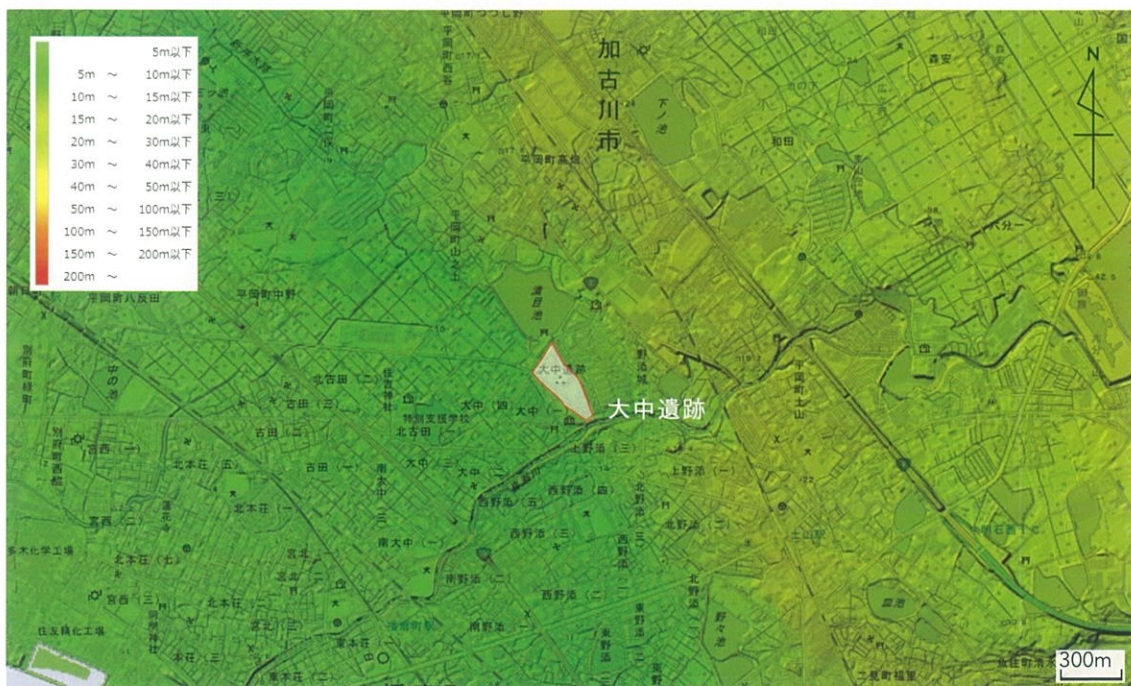
大中遺跡は弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺跡です。昭和37(1962)年に3人の地元中学生に発見されてから現在までに計24次の調査が実施されました。

調査成果として、竪穴建物跡が140棟以上確認され、中国製内行花文鏡片が竪穴住居跡から出土するなど、同遺跡の特異性とその重要性から昭和42(1967)年に国指定史跡に登録されました。

現在も、研究は継続されており、兵庫県立考古博物館では平成30(2018)年から令和4年まで「大中遺跡調査研究活用プロジェクト」を開催実施してきました。明石川から加古川下流域の同時代の遺跡を考察した結果、大中遺跡が最も大きくなった弥生時代後期は自然災害、人口増加などにより周辺集落などが安全で広い場所に移ってきた可能性もあることなどがわかってきています。また本プロジェクトを契機に始められた出土遺物の見直し作業から絵画・記号土器や他地域に由来する土器など多数が発見されています。



3 大中遺跡 全景写真



4 大中遺跡 遺跡位置と周辺地形(国土地理院 地理院地図GSI Mapsをもとに作成)



5 大中遺跡・山之上遺跡で見つかった竪穴住居跡  
 (『弥生集落転生—大中遺跡とその時代—』2022 兵庫県立考古博物館を一部改変)

## 大中遺跡の復元イラスト

大中遺跡の復元イラストを見てみると、遺跡付近一帯は内陸から海へ向かいとてもなだらかな地形が続いています。大中遺跡は緩やかな野口段丘上にあり、標高は14m前後で決して眺望の利く立地とは言えない地形に形成されています。海岸沿いには大中集落の衛星集落ともいえるような小集落が点在し海へ船を出しています。播磨灘には淡路島の山々が聳え、その中腹の集落からは生活の煙もしくは狼煙が上がっています。これら集落は左から塩尻西遺跡、舟木遺跡、五斗長垣内遺跡という実在の弥生時代後期の集落遺跡で、実際の位置に従ってイラストに描かれています。



6 大中遺跡復元イラスト(『弥生時代後期の大中遺跡』:小東憲朗 当館蔵)

## 大中遺跡の 特徴的な出土遺物

大中遺跡で出土した遺物は、在地の特徴を持つ土器を中心に展開しますが、日本海側や畿内など他地域産及びその影響を受けたものも少なからず確認されています。なかでも「手焙形土器」は畿内を中心に派生し、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の特定の時期にのみ出現する土器形式で、当遺跡からも少数ながら出土していることから、当該期に畿内の影響が少なからず及んでいたことがわかります。また本遺跡からは鉄製品が発見されています。当時の日本には鉄を生産する技術はありませんでしたが、鑄造技術は大陸から伝わっていました。材料の鉄は大陸から輸入していたと考えられ、当遺跡から中国製の内行花文鏡片が出土していることから、本遺跡と大陸との関係があったことが窺えます。



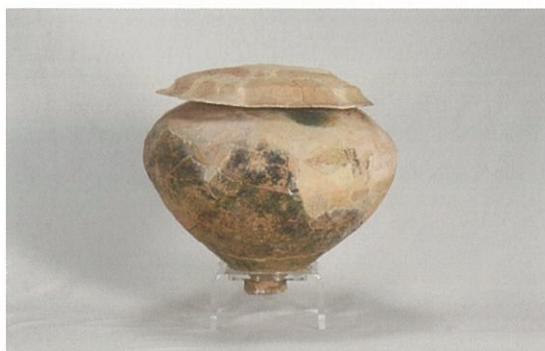
7 鉄製品(当館蔵)



8 出土土器(当館蔵)



9 手焙形土器(当館蔵)



10 土器棺(当館蔵)



11 特異な土器と土製品(当館蔵)

明石市初の弥生集落発見!

# 東野町遺跡(明石市)

東野町遺跡は明石市で初めて発見された弥生時代後期の高地性集落遺跡です。海岸線から約800m北側の明石海峡及び摂津灘を見渡すことのできる標高約40mを測る段丘縁辺部に立地しています。

竪穴住居跡2棟が発見され、その形態はベッド状遺構や中央土坑を伴うなど播磨地域の影響を受けています。うち1棟は火事によって被害を受けた「焼失住居」で、火災により炭化した上屋の部材や、火災直前



12 東野町遺跡から東方を望む(明石市提供)



13 焼失住居写真(明石市提供)

まで使用されていたまゝの状態の土器類が確認されています。

地理的に摂津地域(畿内)と播磨地域(畿外)の境界部であり、淡路島も望むことのできる立地環境であるため、当遺跡の役割、意義について注目されています。



14 東野町遺跡 遺跡位置と周辺地形 (国土地理院 地理院地図 GSI Maps をもとに作成)



15 東野町遺跡 遺構配置図(明石市提供)

## 東野町遺跡の 特徴的な出土遺物

当遺跡では、在地系の特徴を持つ遺物が多く出土しています。土器の胎土(土器の材料に使われた粘土)は集落周辺で採掘したであろう台地上のものを使用しており、土器に施された文様も在地系の特徴が窺えます。



16 出土土器(明石市提供)

明石海峡随一の軍事拠点!?

# 塩壺西遺跡、塩壺遺跡(淡路市)

塩壺西遺跡、塩壺遺跡は淡路島北端より少し南下した東海岸沿いの津名山地中腹に形成された弥生時代後期の高地性集落遺跡です。両遺跡は同一の尾根線上に立地し、いずれも同時期に属するため一連の遺跡と考えられています。

竪穴建物跡は塩壺西遺跡で13棟、塩壺遺跡で6棟の計19棟が確認され、物見や狼煙に利用されたと考えられる掘立柱建物や土坑群などが確認されています。また大型の鉄鏃が発見されたこと

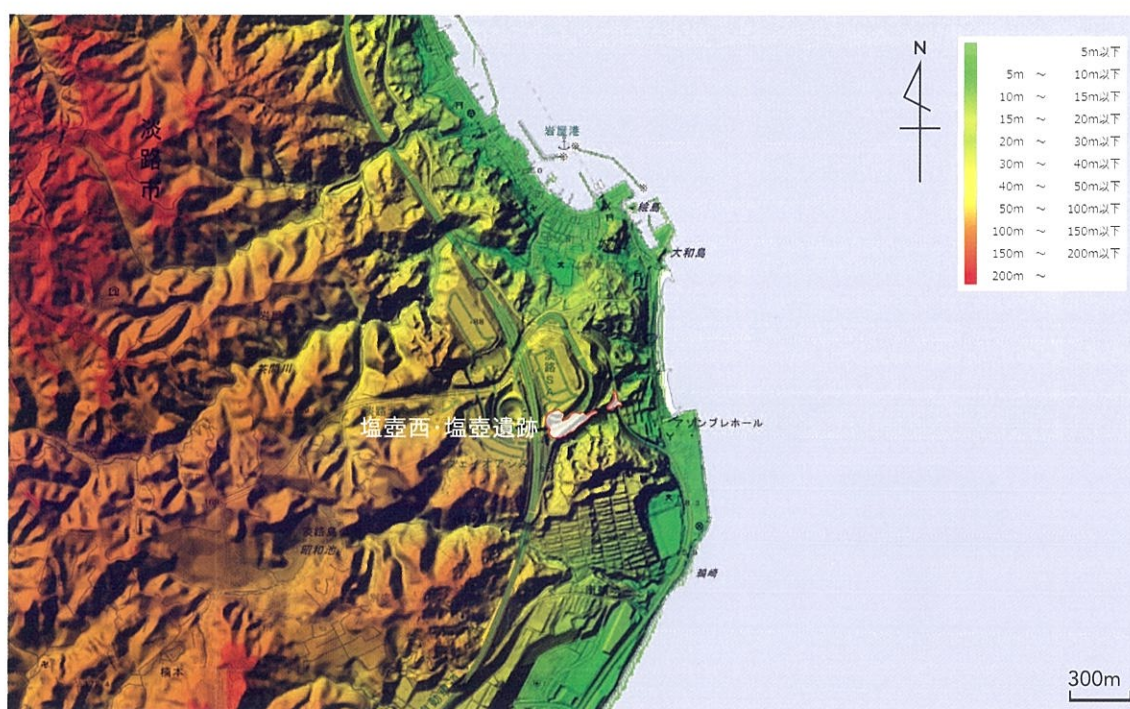
も注目されます。これらの発掘成果と立地環境などから、本遺跡は軍事拠点としての役割があったとも考えられています。



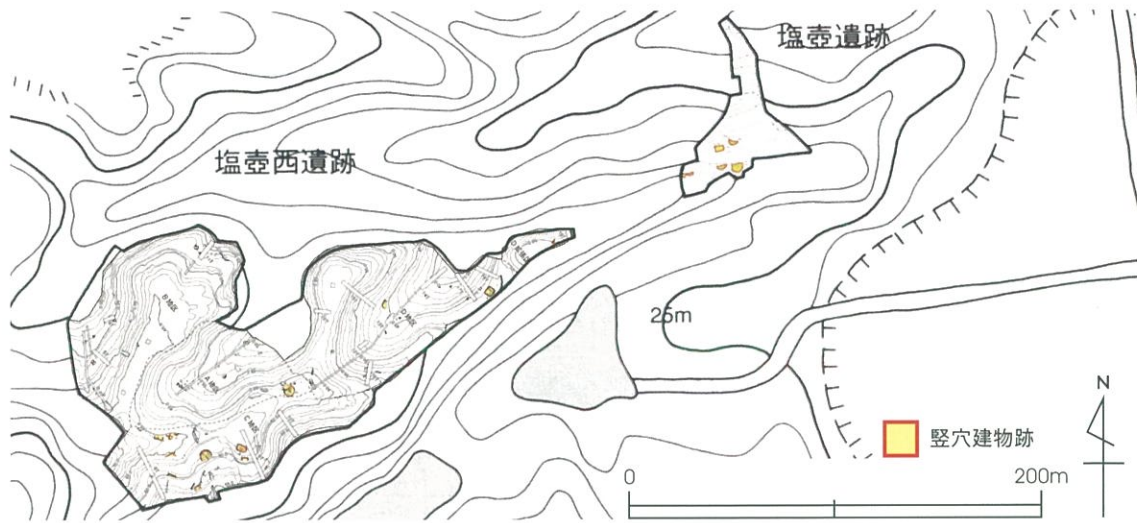
17 塩壺西遺跡 全景(兵庫県立考古博物館提供)



18 竪穴建物(兵庫県立考古博物館提供)



19 塩壺西遺跡、塩壺遺跡 遺跡位置と周辺地形(国土地理院 地理院地図GSI Mapsをもとに作成)

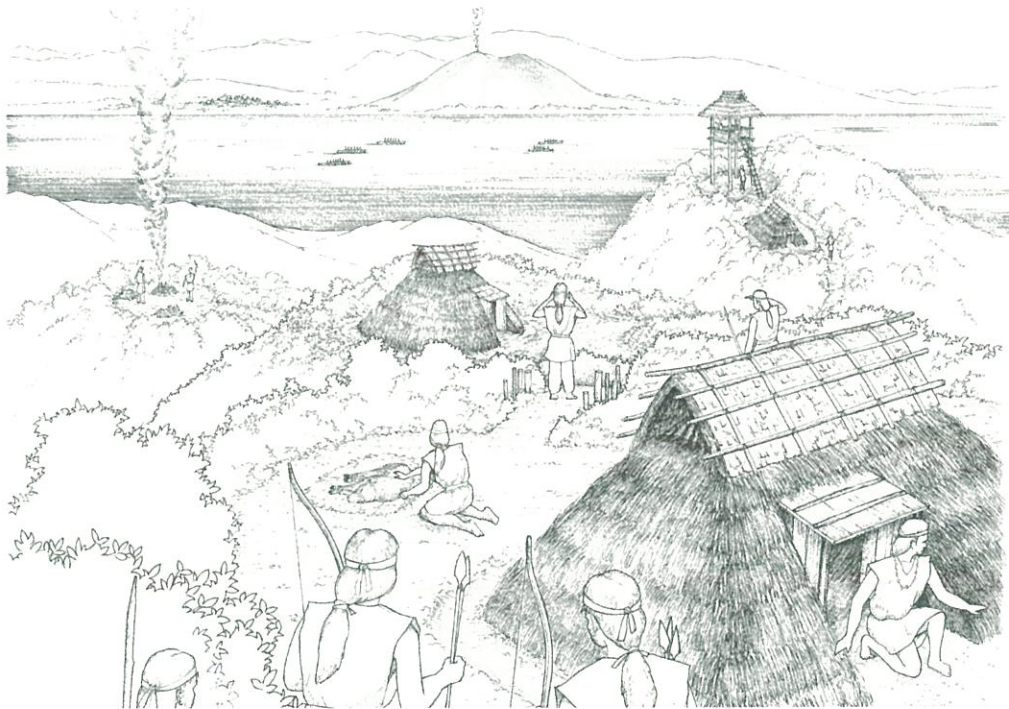


20 塩壺西遺跡、塩壺遺跡 遺構配置図(『塩壺西遺跡』1997『塩壺遺跡』2002兵庫県教育委員会をもとに作成)

## 塩壺西遺跡、塩壺遺跡の復元イラスト

塩壺西遺跡、塩壺遺跡の復元イラストを見てみると、大中遺跡とは違い、山地が海まで続くような急峻な地形に集落が立地しています。明石海峡を一望できる山地尾根から少し下った箇所に物見櫓が確認できます。また尾根上からは狼煙を上げており、呼応するように対岸の本州側にある山の頂上からも狼煙が上がっています。人々は弓矢や槍などの武器を携え狼煙を見つ、意識は明石海峡へ向かっているように描かれています。

本遺跡の復元イラストからは、「明石海峡=畿内(政治的重要地域)の入口」の守備と、往来する船舶の監視を担い、異常があれば狼煙によって即座に且つ広域に伝達する機能を備えていた軍事施設としての側面を色濃く表現していることが見てとれます。



21 塩壺西遺跡 復元イラスト(『塩壺西集落の想定復元』:小東憲朗 兵庫県立考古博物館提供)

## 塩壺西遺跡、塩壺遺跡の 特徴的な出土遺物

両遺跡で出土した特徴的な遺物に、弥生時代としては国内最大級の鉄鏃(全長13.6cm)が出土していることが挙げられます。これは実用的なものではなく、当集落が持つ性格を象徴するような役割があったのかもしれません。また淡路島特有の技工を用いて作られた土器なども出土しています。



22 塩壺西遺跡出土 鉄鏃(兵庫県立考古博物館提供)



23 塩壺西遺跡出土土器(兵庫県立考古博物館提供)

弥生時代屈指の鍛冶関連遺跡!

# 五斗長垣内遺跡(国指定史跡 淡路市)

五斗長垣内遺跡は淡路島北部を南北に貫く津名山地の西斜面に所在する弥生時代後期の高地性集落遺跡であり、当時代屈指の鍛冶関連遺跡です。

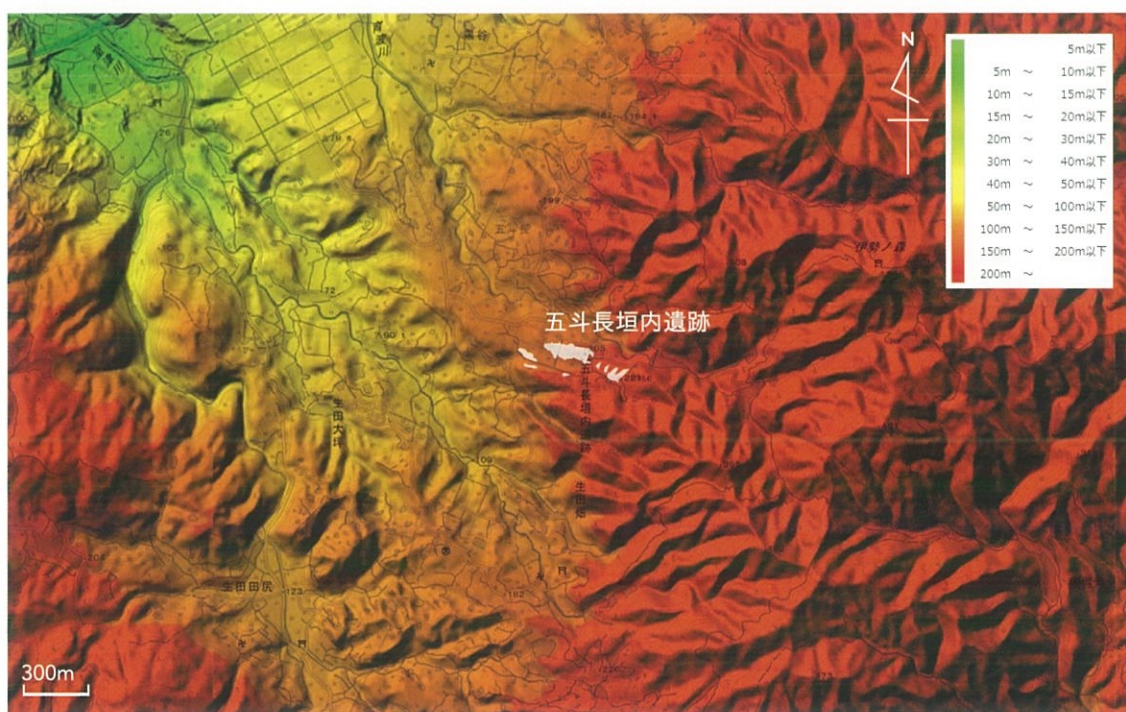
炉を有する竪穴住居跡など計23棟が発見されました。鍛冶作業に関わる遺構は、大型建物が1~2棟と小型建物数棟を単位として各時期にエリアを斜面上へ移行しながら継続的に鍛冶を行っていました。多数の鉄製品やその加工に使用されたと考えられる敲石や砥石などの石製品が出土しています。



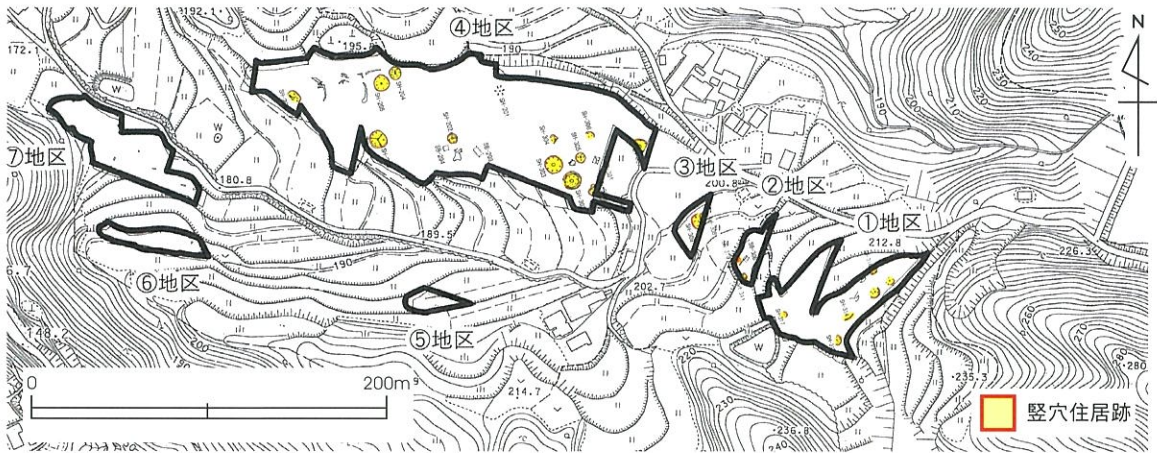
24 五斗長垣内遺跡 全景(淡路市教育委員会提供)



25 竪穴建物群(淡路市教育委員会提供)



26 五斗長垣内遺跡 遺跡位置と周辺地形(国土地理院 地理院地図GSI Mapsをもとに作成)



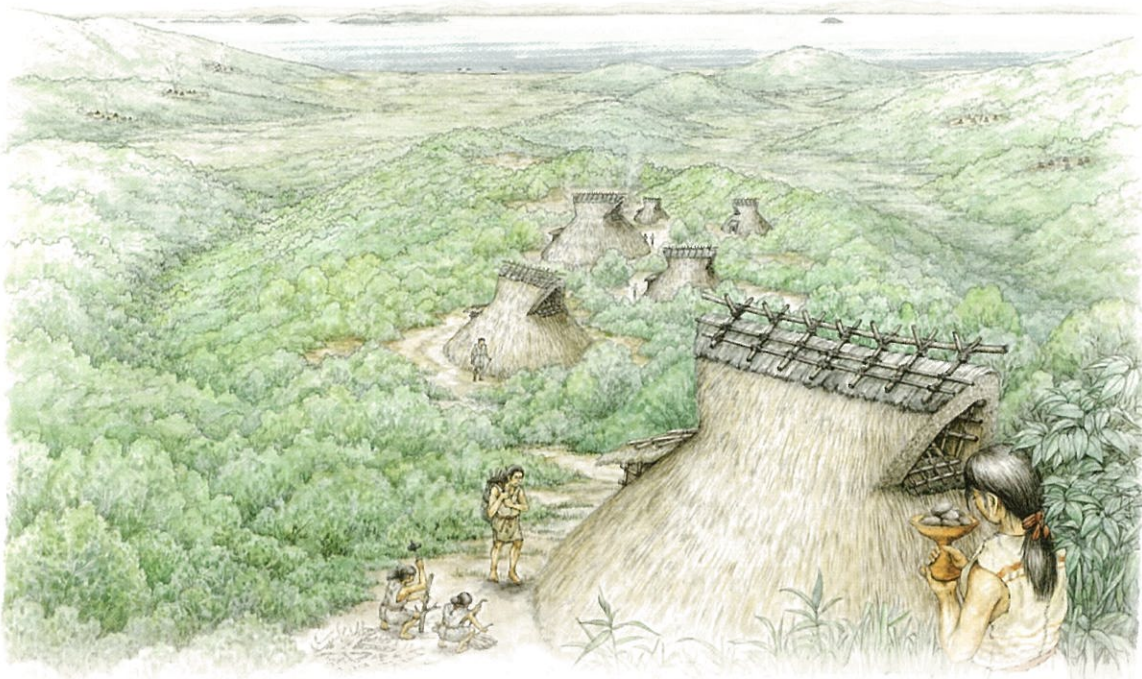
27 五斗長垣内遺跡 遺構配置図（『五斗長垣内遺跡発掘調査報告書』2011 淡路市教育委員会をもとに作成）

## 五斗長垣内遺跡の復元イラスト

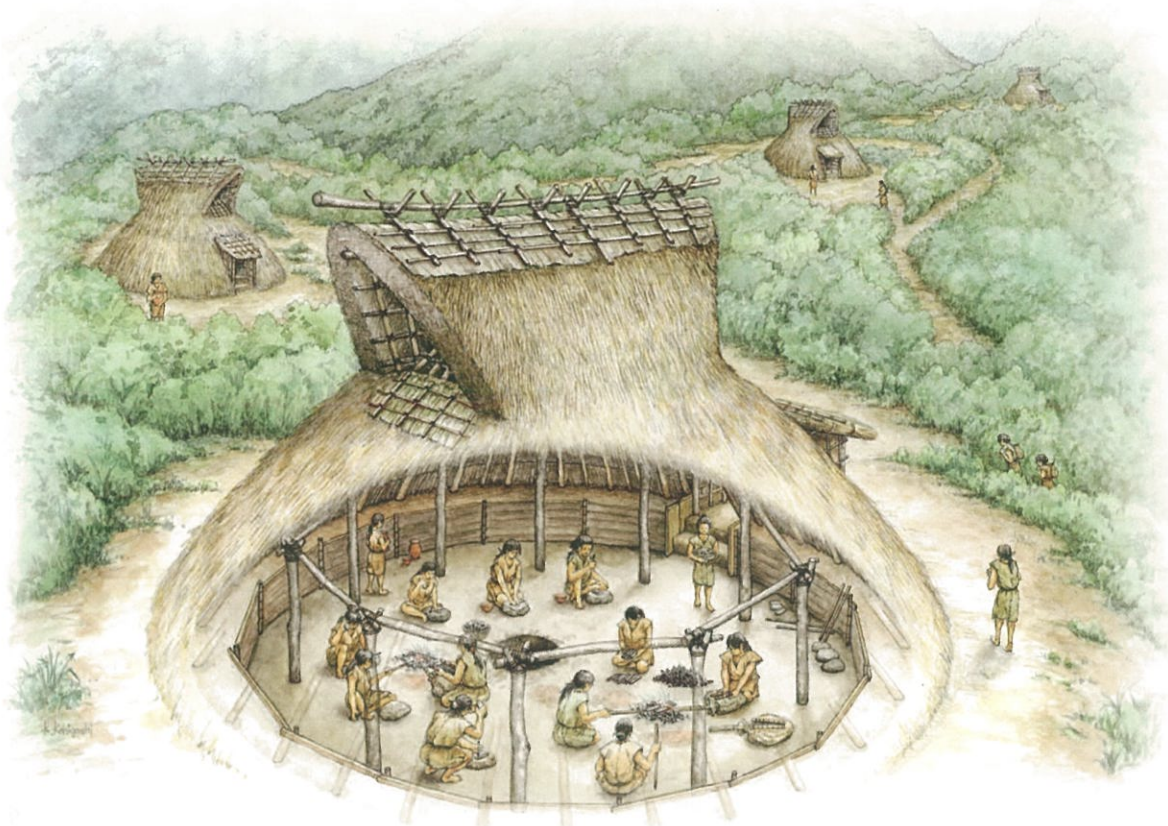
五斗長垣内遺跡の復元イラストを見てみると、同じ淡路島北部の塩壺西遺跡、塩壺遺跡とは異なり、斜面が海まで緩やかに続き、開析が進んだ多くの谷が山の手状に入り組む地形の尾根部に集落が立地しています。眼下には山の斜面にいくつかの集落があり、山が終息した辺りには平地も確認できます。その先には、優良な漁場である「鹿の瀬」などを有する播磨灘が広がっています。更には遠く家島諸島や播磨平野が一望できます。

本遺跡の復元イラストからは、豊かな漁場であると同時に水運の要所である播磨灘を注視していたことが読み取れます。

また、鉄器製作に関わる鍛冶関連施設が立ち並ぶ様相は、五斗長垣内遺跡発掘調査の成果がつづさに表現されています。



28 五斗長垣内遺跡復元イラスト（「集落遠景」：小東憲朗 淡路市教育委員会提供）



29 五斗長垣内遺跡復元イラスト（「鉄器製作住居」：小東憲朗 淡路市教育委員会提供）

## 五斗長垣内遺跡の特徴的な出土遺物

本遺跡では、鑿（のみ）や鉋（やりがんな）などの鉄製品や敲石といった工具など多数の鍛冶に関連する遺物が出土しています。また土器では淡路島特有の技法を用いたもの、瀬戸内や日本海側（丹波、丹後）の影響が窺えるものも出土しており、鍛冶技術の伝播を捉える上でも貴重な資料と言えます。



30 鉄鏃（淡路市教育委員会提供）



31 板状鉄斧(淡路市教育委員会提供)



32 台付無頸壺(淡路市教育委員会提供)



33 器台(淡路市教育委員会提供)



34 絵画・記号土器(淡路市教育委員会提供)



35 敲石(淡路市教育委員会提供)



36 台石(淡路市教育委員会提供)

## 大中遺跡から発掘された弥生の漁具と 海底から採集された弥生の漁具

大中遺跡からは飯蛸壺、土錘、ヤスといった漁具が発掘されました。中でも飯蛸壺は多量に見られていることから、飯蛸漁が盛んに行われていたことがわかります。

大中遺跡から最も近い播磨灘の漁場からも当時の人々が使用し、そのまま1,800年間海底に忘れ去られた多量の飯蛸壺が採集されています。



37 大中遺跡から発掘された弥生の漁具(当館蔵)



38 海底から採集された弥生の漁具(当館蔵)

# 眺望

## 眺望分析とは

往時の人々がなぜその場所に住まいや活動の拠点を設けたかを考えるとき、手がかりのひとつとなるのが「眺望」です。その場所からどこをどのように視認したかが分かると、人々の戦略や社会状況の一端をうかがい知ることができます。

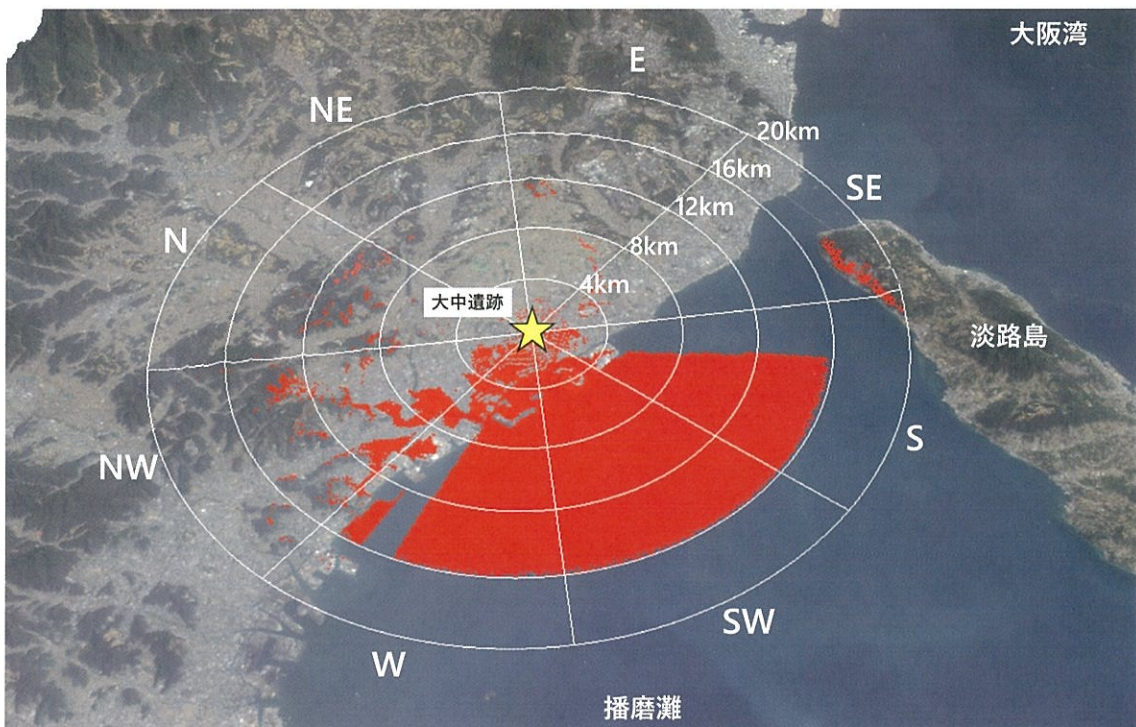
眺望をシミュレートする手法として「眺望分析」(可視領域分析)があります。これはGIS(地理情報システム)の空間分析法のひとつとして知られ、地形の情報などをもとに眺望可能な範囲を計算・描画するものです。人の認識・経験による「眺望」を客観的に捉えることができる、優れた技術であると言えるでしょう。

この分析手法を駆使し、大中遺跡、東野町遺跡、塩壺西遺跡、五斗長垣内遺跡という4遺跡の「眺望」や立地の特徴を探っていきます。

なお以下の分析では、観測地点の高さとして標高+1.5m(人の目線の高さ)、最大(限界)視認距離として20kmを定め、天候や時間帯、人の視力などの諸条件に恵まれた場合の眺望をシミュレートしています。

## 大中遺跡の眺望分析

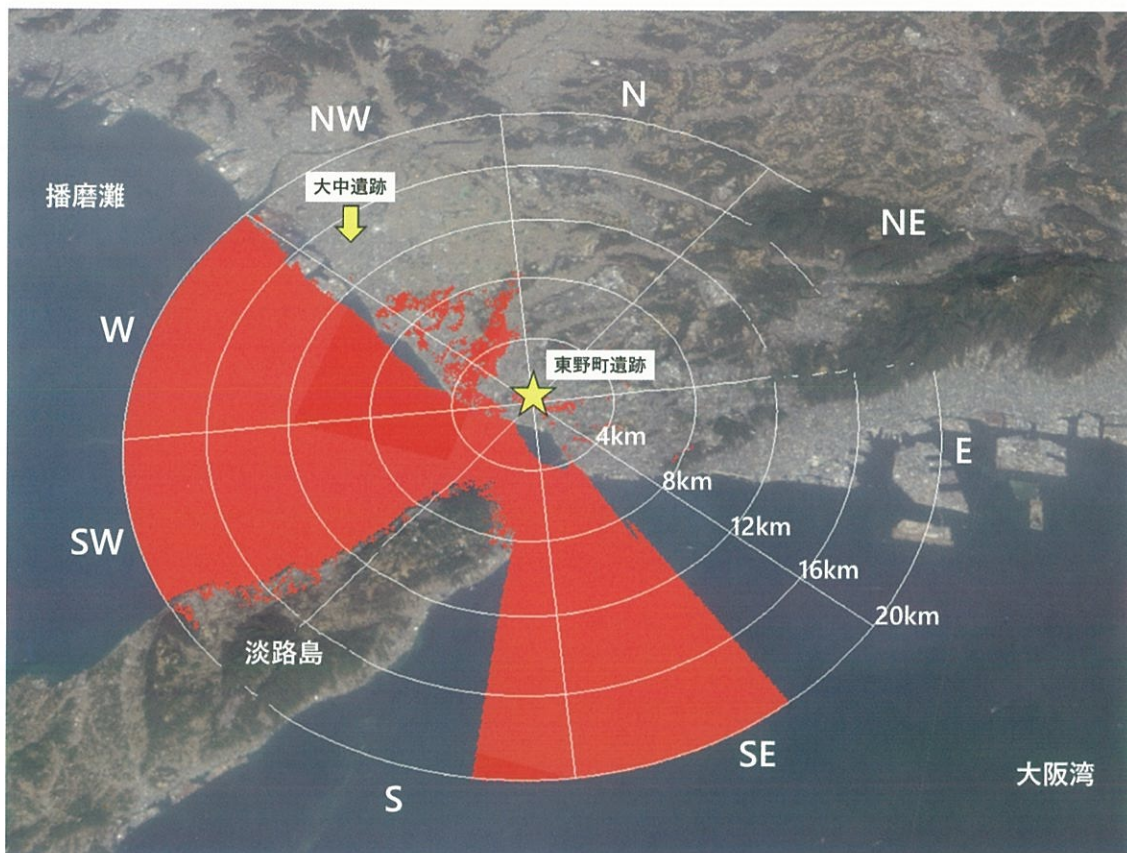
大中遺跡は標高12~14m程の段丘上に位置します。その立地においては際立って高い場所に成立した遺跡ではありませんが、特に南・南西・西側に対する見通しは良好であると言えます。地域全体の中でも、播磨灘を広く視野に収めうる土地が選択されたことがうかがえます。また、大中遺跡からは淡路島北西端の山裾や海岸線も視認できたようです。しかし、北側~南東側にかけては死角となる範囲も広く存在しました。当時の交通において重要な結節点を占める明石海峡やその周辺に対する眺望性は、それほど期待できなかつたと言えます。



39 大中遺跡眺望分析図

## 東野町遺跡の眺望分析

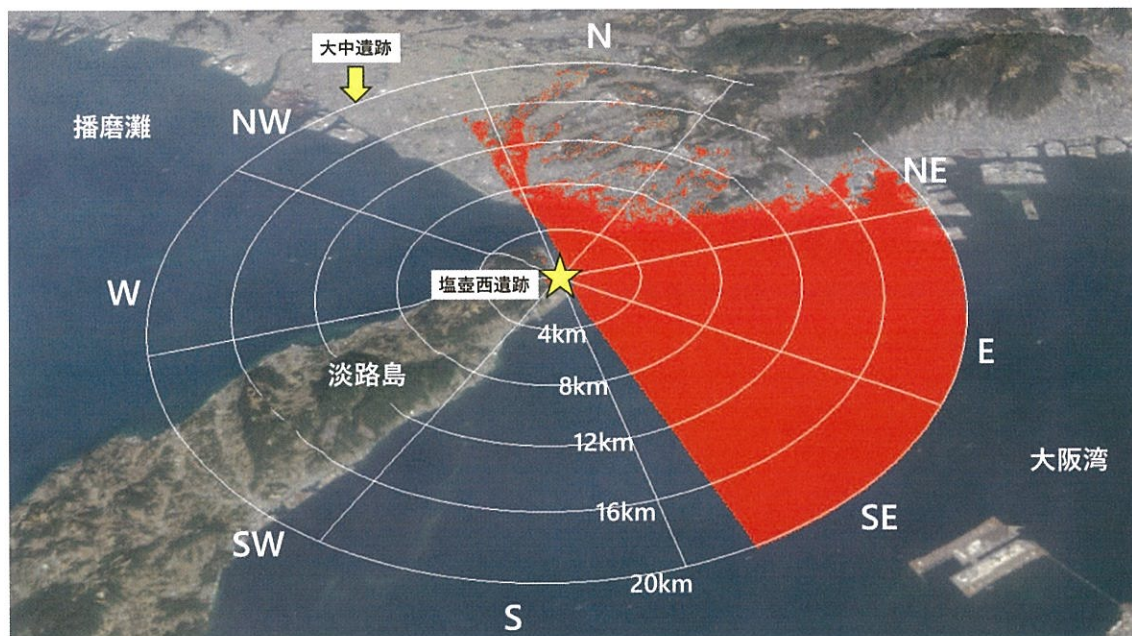
東野町遺跡は標高約 40m の場所に立地しており、弥生時代後期後葉の竪穴住居跡などが発見されています。立地場所の比高(周辺平地部からの高さ)は 30m 以上をとるため、水田稲作には不便であったことも指摘されます。一般的にそのような種の遺跡は「高地性集落」と呼ばれています。東野町遺跡の眺望は、西側、南西側、南東側に対し非常に良好であり、播磨灘から淡路島北部周辺をよく視認できたことがわかります。眼前の明石海峡も視界に十分収めることが可能でした。このように海上や海峡部、淡路島に対する眺望が大変優れていた反面、北西側にあたる播磨平野やその海岸線、また東側の海岸線などへの見通しはかなり悪かったということも興味深い点と言えるでしょう。



40 東野町遺跡眺望分析図

## 塩壺西遺跡、塩壺遺跡の眺望分析

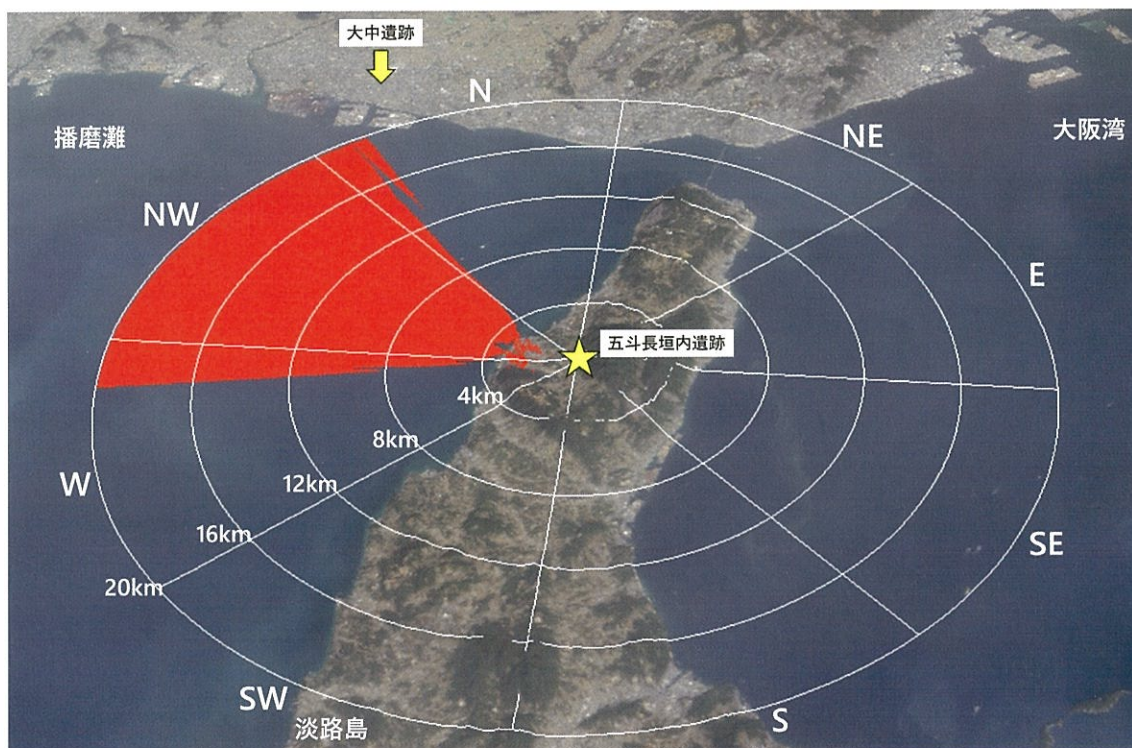
塩壺西遺跡、塩壺遺跡は淡路島北端に所在し、標高約70mの丘陵上を占めています。比高は約50mで、鉄鏃やノロシ跡とも推測される施設なども見つかっており、交通の要衝をおさえた「高地性集落」として有名な遺跡のひとつです。塩壺西遺跡、塩壺遺跡の眺望は、北側の明石海峡や平野部をよく見通すことができ、また東・南東側の海上も広く視界に収めます。従来想定されてきたような、海峡部や沿岸部の監視、あるいは対岸との情報通信があったなら、十分にその役割が期待できる立地であったと言えるでしょう。一方、北西、西、南側などに対してはほとんど眺望がきかず、淡路島の海岸線・沿岸部に死角が多くできています。



41 塩壺西遺跡、塩壺遺跡眺望分析図

## 五斗長垣内遺跡の眺望分析

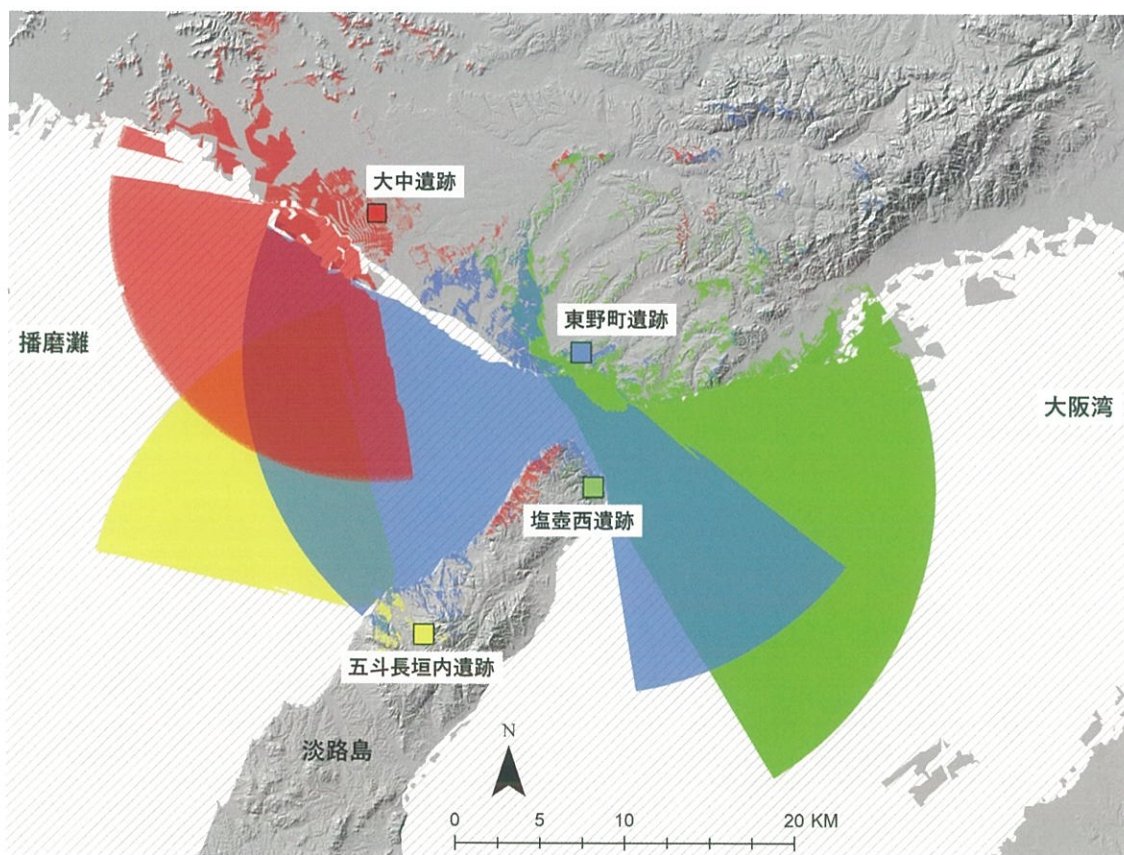
五斗長垣内遺跡は、淡路島北部の標高約200mの丘陵上を占める遺跡であり、多数の鉄製品や鍛冶工房などが発見されたことでよく知られています。この遺跡の眺望は特定の方角に限定されることが大きな特徴として挙げられます。上記の通り立地場所の標高は約200mという高い数値を示しますが、遺跡周辺の地形が障壁となるため北西方向を除いて眺望できる範囲は存在しません。言い換えると、北西側を除いては周囲からも見えにくいような、海岸線から奥まった土地が選択されたことが分かります。



42 五斗長垣内遺跡眺望分析図

## 眺望分析まとめ

この展示で取り上げた4か所の弥生遺跡は、令制国の播磨東部と淡路北部に分散して所在しますが、形成年代の一点は弥生時代後期後葉(およそ2世紀後半)の時期を共有します。集落立地の古地形や標高には違いがあり、集落の始まりや終わりが少しずつ異なりますが、『魏書』東夷伝倭人条や『後漢書』倭伝に登場する「倭国乱」の抗争が予測される年代には同時存在します。東西の海上交通の要となる播磨灘・明石海峡・大阪湾西岸の海域がもし共同戦略を採るなら、ほぼ見渡せます。緊張関係の高まったはずのこの時期には、物流の海上ルートの要衝である東部瀬戸内から大阪湾への広域眺望を軸とした一時的な連携活動が行われたことも想像されます。後漢鏡・鉄製武器・鉄素材・漁労具など西から東に流入する威信財・利器類や東から西に進む水先案内の船舶など、急を要する情報を知らせ合ったとみれば、邪馬台国を含む倭国形成の連合体に一役を担った地域の重要性が手に取るように理解できます。可視条件が異なる集落の立地は弱点ではなく、初期農耕社会が海を見張るといった社会的分業に一層力点を置き始めた動静としてとらえることもできるでしょう。ヤマト王権成立前夜の人々は、多様な機能の集落を必要としましたが、最新情報の入手は共通課題として向き合ったことが考えられます。



## 播磨町の新たな文化財

令和6(2024)年に浅原重利・藤原清尚の2名から当館に石器1031点が寄贈されました。1964(昭和39)年から1974(昭和49)年までの11年間にわたり、両氏が大中遺跡(播磨町大中)及び山之上遺跡(加古川市山之上潰目池)から採集したものです。また本資料は、令和3年度に文化財指定された石器195点(番号:R3-1、整理番号:23)と同時期及び同地区において採集されたものです。

旧石器時代(2~3万年前)、縄文時代(1万6000年~2400年前)、弥生時代(2400年~1750年前)などの石鏃やナイフ形石器などの製品及び加工が施されたもの259点の他、石器製作時に発生した剥片や、碎片など772点があります。2~3万年前から大中遺跡周辺における人々の活動の痕跡が捉えられる貴重な資料として当館で大切に保管されます。



44 潰目池西岸から大中遺跡・山之上遺跡を望む



45 大中遺跡・山之上遺跡 採集石器(当館蔵)

## まとめ

本展では、復元イラストを足掛かりとして、大中遺跡、東野町遺跡、塩壺西・塩壺遺跡、五斗長垣内遺跡といった明石海峡や播磨灘を望む弥生時代後期集落4遺跡を取り上げ、当時の景観や立地、出土品から各々の特徴について検討し、弥生人が見ていた風景から集落造営の目的に迫る試みを行いました。また「眺望分析」を加えた検討は、各遺跡を新たな切り口から捉える有意義なアプローチにもなりました。

大中遺跡の復元イラストでは、海岸線まで続く起伏のない地形に遠く淡路島を望む景観が描かれています。眺望分析の結果、本遺跡は眼前の播磨灘及び海岸線を見渡すことができること、可視領域は東部の明美丘陵、北・西部の野口段丘に遮られ南方にのみ大きく開けており、明石海峡や加古川方面は不可視であること、淡路島北西端山裾などが視認できることが判明し、眺望分析結果と復元イラストに描かれた景観が類似していることもわかりました。

また、東野町遺跡、塩壺西・塩壺遺跡については播磨灘や明石海峡、大阪湾西岸を網羅するに相応しい眺望域を持ち、双方の視覚的欠点を補完し合うような連携性も窺えました。五斗長垣内遺跡は眺望域が限定的であることから、「監視しやすい」というよりも「見つけにくい」土地を選定したとも捉えられる立地であることがわかりました。そして特に政治的、軍事的に陸・海路ともに重要な当地域を、複数集落が連携的に情報共有しつつ管理していた可能性にも言及しました。

GISはじめ先進技術の発達とその活用により、遺跡が持つ特性情報を多方面から可視化することで新事実が解明されることが今後期待されます。同様に復元イラストも相乗的に精度を高めるでしょう。当館も大中遺跡研究において、これまでの蓄積と先進技術を活用し、これからも「新発見」を住民の皆様にお届けできるよう、邁進してまいります。



# 考古学年表

◎:国指定 ○:県指定 △:市・町指定

| 年代               | 時期区分        | 播磨町・播磨地域の主な遺跡など  |
|------------------|-------------|--|
| 3万年前<br>B.C14000 | 旧石器時代<br>前期 |  |
|                  | 中期          | 藤江川添遺跡(明石市)<br>西八木遺跡(明石市)  |
|                  | 後期          | △大中遺跡(播磨町)・山之上遺跡(加古川市)／石器<br>西脇遺跡(明石市)   |
| B.C7000          | 縄文時代<br>草創期 |  |
| B.C4000          | 早期          | ○福本遺跡(神河町)   |
|                  | 前期          | △大歳山遺跡(神戸市)  |
|                  | 中期          |  |
| B.C2000          | 後期          | 丁・柳ヶ瀬遺跡(姫路市)<br>片吹遺跡(たつの市)   |
| B.C1000          | 晩期          |  |
| B.C600           | (早期)        | 日笠山貝塚(高砂市)   |
| B.C300           |             | 今宿丁田遺跡(姫路市)  |
| A.D.1            | 弥生時代<br>前期  | 新方遺跡(神戸市)  |
|                  | 中期          | 美乃利遺跡(加古川市)  |
|                  | 後期<br>終末期   | 玉津田中遺跡(神戸市)<br>養久山・前地遺跡(たつの市)  |
| 300              | 古墳時代<br>前期  | ◎大中遺跡 住居／土器<br>西条52号墳(加古川市)<br>○養久山1号墳(たつの市)   |
|                  | 中期          | ○愛宕塚古墳<br>◎丁瓢塚古墳(姫路市)<br>◎吉島古墳(たつの市)<br>◎西条古墳群(加古川市)<br>◎五色塚古墳(神戸市)<br>◎石の宝殿及び竜山石採石遺跡(高砂市) |
|                  | 後期          | ○西宮山古墳(たつの市)<br>平荘湖古墳群(加古川市)   |
| 700              | 飛鳥時代        | ◎鶴林寺(加古川市)<br>◎播磨国分寺跡(姫路市)<br>古大内遺跡(加古川市)<br>◎西条廃寺(加古川市)                                   |
| 800              | 奈良時代        | 古代山陽道推定地<br>太寺廃寺(明石市)  |
| 1100             | 平安時代        | 魚住古窯址群(明石市)  |
| 1200             |             | 福田片岡遺跡(たつの市)   |
| 1300             | 鎌倉時代        |  |
| 1400             | 室町時代        | ◎鶴林寺本堂(加古川市)<br>◎白旗城跡(上郡町)<br>城山城跡(たつの市)<br>◎感状山城跡(相生市)<br>◎置塩城跡(姫路市)                      |
| 1500             | 戦国時代        | 本荘蓮花寺構居跡<br>濠跡／青磁など  |
| 1600             | 安土桃山時代      |  |
| 1700             | 江戸時代        | 今里傳兵衛／新井用水<br>◎姫路城跡(姫路市)<br>◎明石城跡(明石市)   |
| 1800             |             | 梅谷七右衛門／庄屋職<br>◎高砂堀川湊及び工楽松右衛門旧宅(高砂市)  |
| 1900             |             | ジョセフ・ヒコ／新聞発行   |
| 2000             | 近代・現代       | 別府鉄道／開通<br>◎播州葡萄園跡(稲美町)  |

## 特別展

復元イラストから読み解く  
大中遺跡と明石海峡・播磨灘を望む遺跡  
—弥生時代後期集落の眺望分析—

令和6(2024)年10月5日発行

編集・発行 播磨町郷土資料館

〒675-0142

兵庫県加古郡播磨町大中1-1-2

TEL 079-435-5000

FAX 079-436-0135

印刷:株式会社六甲商会



[ホームページ]